

環境を考える経済人の会 21

2005 年度第 11 回京都大学地球環境特別公開講座

新田恭子氏（NPO セカンドハンド代表） 2006.1.12

松下和夫 今日では今年最初の講座ですが、来週で最終回になります。

今日は、NPO セカンドハンド代表の新田恭子さんをお招きしています。全体で 12 回の講座があったのですが、唯一の女性講師ということです。残念ながらこれは日本の現状を反映してしまったのかもしれませんが。そのようなことで是非期待をしてお話を伺いたいと思います。

新田さんは、大学を出られた後、ディスコの DJ から始まって、フリーアナウンサーになられて、海外に旅行をしている中でいろいろな出会いがあり、その経験をもとにしてラジオ番組などを担当するとともに、イギリスでチャリティショップという仕組みを知り、カンボジアに行ったことをきっかけとして、1994 年にセカンドハンドという NPO を設立されて、現在香川県を中心として県内外で活動をされています。今日は NGO の立場から国際協力をされている新田さんからお話を伺いたいと思います。それではよろしくお願ひ致します。

平均就学年数が 4.6 年程度のカンボジア

新田恭子 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、セカンドハンド代表の新田と申します。

本業がフリーアナウンサーということで、日頃からこのようにマイクを持って会場の隅でご挨拶をされる方のご紹介をしたり、ご結婚披露宴などで、司会をするのが私の本業です。そのかわりでセカンドハンドという NPO を 12 年前に立ち上げて活動しています。

今日は、なぜ私がこのような活動を始めようと思ったのか。どのようなことがきっかけになって、どのようにこの活動を始めたのか。また、カンボジアの現状などをお話させていただければと思います。その前に、世界の状況、今の世界の貧困問題について触れたいと思います。現在、世界には約 190 カ国、63 億人の方がいらっしゃいますが、貧困の原因の問題を抱える国が 130 を超えます。世界 63 億人の、約 4 分の 3 の約 43 億人は開発途上国で暮らす人です。約 20%、地球上の 5 人に 1 人が 1 日 1 ドル以下の収入、12 億人が極度の貧困に苦しむ人と言われています。途上国では 1 日 1 ドル以下の収入ですが、日本はというと 1 万ドルで約 1 万 1,000 円、100 倍になります。

世界中で 2 億 4,600 万人の子供が働いています。5 歳から 14 歳の子供が働かざるを得ない状況で働いているのですが、この 2 億 4,600 万人という数は、アメリカの人口と

ほぼ同数、日本の人口の約2倍という数です。また、世界の17%の人々が安全な水を飲めません。初等教育の就学率は、今上昇していますが、就学しても卒業できる子供が半数程度という状況です。いまだに就学年齢に達しているのに、1億3,000万人の子供が学校に通えない状況があるとされています。その内97%が途上国に暮らす子供たちです。そして、毎日、世界各地で3万人を超える子供たちが予防可能な疾病で死亡しています。エイズ(HIV)の問題も深刻化していますが、2004年新規にHIVに感染した15歳未満の子供は、世界で64万人です。多くが母子感染で、その9割がアフリカ地域と言われています。世界で毎日1万4,000人が新たに感染しており、アジアでも猛威を振るい始めています。このエイズによる孤児も、現在1,500万人以上いると言われています。

このような世界の現状の話を聞いて、「関係ないな」と思っている人もいるかもしれませんが、これは全く関係ない話ではなく、皆さんとこの世界の人々はつながっているのです。貧困問題、国が経済的に貧しいということは、その国の何が原因してということではなく、それは地球上のいろいろなかたちでつながっています。少なくとも、今日皆さんは私を介して、カンボジアという国とつながっています。今日は皆さんにそのカンボジアの話もさせていただきたいと思います。

カンボジアは、平均就学年数が4.6年程度だと思います。小学校に入学をしても、辞めなければいけない子供たちが非常に多くいます。特に、女の子達は卒業までなかなか学校に通うことが出来ません。カンボジアの乳幼児死亡率は14%。たくさんの子供たちが出産の時や感染症などが原因で命を落としています。このカンボジアの現状を少しでも良くしたいということで、私どもは教育、自立支援、そして個人への支援などを行っています。今日は、中盤でその活動の紹介をしているビデオを皆さんにご覧いただきたいと思っていますので、カンボジアの様子もそこを通してご覧いただけるのではないかと思います。

リユースで国際協力を行うセカンドハンド

セカンドハンドの仕組みですが、今日のタイトルが「チャリティショップ(リサイクルショップ)と国際協力」だったのではないかと思います。正確に言うと「リサイクル」ではなく、「リユース」と言ったほうが良いと思います。リユースで国際協力を行っています。ただ、日本ではリサイクルショップが定着しているので、私どもは「リサイクル」と呼ばせていただいておりますが、私どもはこのリユース活動でチャリティショップをやっています。この仕組みですが、全国の皆さんから不用になったもの、もしくは皆さんがどなたかにいただいたけれども使わないもの、タンスの肥やしになっているものなどを無料で提供していただきます。そして、その仕分け、値付け、またお店で販売するのですが、お店に立って販売をする販売員、こういった方々はみんな無報酬のボランティアの方々です。そして、そのお店、物を管理する倉庫は、無料、もしくは格

安でお借りしている物件です。そして、企業がいろいろなかたちで協力をしてくれています。

このセカンドハンドは、そもそもイギリスのチャリティショップを見かけたことがきっかけでスタートすることになりました。イギリスにはチャリティショップが 3,000 店舗以上あります。町を歩けばいたるところにこのようなチャリティショップがあるので、イギリスに行かれた方、特にロンドンに行かれた方は、いろいろな団体がやっているチャリティショップを覗かれたのではないかと思います。国際協力をしている団体もあれば、ある団体は動物愛護のため、ある団体は自然保護のため、また老人福祉のためであるとか、障害者のためであるとか、いろいろな目的を持ってチャリティショップを運営しています。ですから、商品を提供したいという人も、どの活動を支援したいかによって持っていく先を決めればいいのです。

また、お買い物をすることも出来る。市価よりもずいぶん安く買えます。最近リサイクルショップも、日本ではかなり普及しているので、そういったところを利用されている方も多いと思いますが、そのような商業ベースに乗るのではなく、買うことが寄付につながるというシステムです。

商品をゴミにするのではなく、まず誰かに生かしてもらう(リユース)という意味で、これは環境に大変良いのではないかとということと、この売上が誰かの懐に入るのではなく、それがチャリティショップを介して困っている人のために役立てられる。また、世界のために役立てられるというものです。私は、このシステムをイギリスで見て大変感銘を受けました。

滅私奉公ではなく、自分が笑顔になるのがボランティア

最初はイギリスのチャリティショップで、知らずにお買い物をしていたのですが、友人が私の買い物をした袋を見て、「チャリティショップでお買い物をしたのね」と言ったので、「チャリティショップって何？どんなお店？」と聞いたところ、みんなが無料で持ち寄ってきて、無償で働く人たちが販売をして、その売上で困っている人たちのためにいろいろと役に立つ活動をしているという話を聞いて、目から鱗という感じでした。そのようなことが成立するのかと疑問に思いました。そもそもみんなが無料で物を持ってくるのだろうか。ただで働くのだろうか。中古のものを買うのか。今から 15 年前にそのシステムを知ったのですが、当時はまだまだリサイクルというものが日本では一般的ではなく、中古の衣類を着るということに非常に多くの方が抵抗を持っていたと思います。ですから、そのようなお店が成り立つわけがないのではないかと思いました。しかし、合理的で非常に良いシステムだと思いました。もっと知りたくなった私は、改めてイギリスに行って、そのシステムをどのように運営しているのかということマネージャーの方にお話を聞くことにしました。

私は、世界を旅することが非常に好きなので、これまで 35 カ国以上を、主に 1 人で

旅をしています。よくロンドンを拠点に中東のほうに行ってみたり、ヨーロッパ地域を回ったりしていたので、ロンドンに行った時にはチャリティショップに寄っていたのですが、もっとチャリティショップ自体を知りたいと思い、2～3週間程度滞在をして、いろいろな地区のチャリティショップを見て回りました。どのお店も活発に活動していました。リバプールでもチャリティショップに入ったのですが、そこで店番をしていたおばあさんが、私が買ったものをきれいにたたみながら、「私はこうやって、こういうところに働けることが、役に立てることが本当に幸せなのよ」と言われました。白髪で90歳を超えた方ではないかと思いますが、レジを打つ手も振るえて、値札も十分に見えないくらい目がかすんでいらっしゃる方なのですが、その震える手でレジを打ちながらそのように語ってくれました。「こうやって誰かの役に立てるのが本当にうれしいの」と言って「Thank you」と言った時の笑顔がキラキラとして見えました。

私はそれまでボランティアや国際協力というのは、興味はありましたが、ボランティアをやる人というのは何か特別な人なのではないか思っていました。募金はしても、団体の中で積極的に活動する気はありませんでした。ボランティアに対するイメージは、自分を殺して人様の役に立つという「滅私奉公」的なものでしたが、実際にそのおばあさんに出会って、自分が輝いてもいいのだということを感じさせられました。そのおばあさんに会って、私のボランティアに対する概念がずいぶん変わったような気がします。それも一つの大きなきっかけだったのではないかと思います。私もこうやって「誰かの役に立つのがうれしい」とか、「誰かに喜んでもらえるのがうれしい」というような活動がしたい。日本にもないのかと思い、帰国していろいろと調べてみたのですが、日本にはこのようなチャリティショップは当時は一つもありませんでした。

遠い昔の話ではなく、今も心に影を落とすポル・ポト時代

イギリスに行った直後、カンボジアに行く機会を得ました。カンボジアも大変興味のある国ではありました。アンコールワットがあるので、是非行ってみたいと思っていたのですが、内戦がまだまだ続いている状態なので、1人で行くのはまだ怖い。そのような時に、ユネスコが主催する「青年ワークキャンプ」があり、現地の大学生たちと寝泊りを共にしながらボランティア活動ができる、楽しそうだと思い、飛びつきました。行く前に、カンボジアについていろいろな本を読みました。そこで初めてポル・ポト時代が、自分が生まれた後の出来事だということを知りました。正直それまでニュースなどでは見ていましたが、ずいぶん昔のことだというイメージを自分の中で持っていたのですが、ポル・ポト時代は1975年から1979年です。私は1965年生まれなので、当時10歳であった時にポル・ポト時代があったということを知り、非常にショックでした。ポル・ポト時代に同じ歳の人がどのように生き延びたのか。行く前にたくさんの書籍を読みました。ポル・ポトに関する情報や、「ポル・ポト政権がどのようなことをやったのか、なぜこのようなところに至ったのか」という分析をするような書籍はありましたが、

「その時代に子供たちがどのように過ごしたのか」ということを書いている本がなかったので、私は同じ年の青年に話を聞きたいと思いました。私は当時「地球村レポート」というラジオの番組をやっていました。自分で現地に行って取材をしてきて、編集して流すというものだったのですが、その「地球村レポート」という番組の中でカンボジアの青年の話を知りたいと思い、1994年2月にカンボジアに行く時に、録音の機材も持って現地に行きました。

ユネスコで働いていた青年が、私と同じ年だったので、その彼に話を聞くことにしました。親しくなったところで、話を聞かせてほしいと頼んだのですが、彼の答えは「ノー」でした。非常に明るい人だったのですが、その話をした途端に下を向いて動かなくなってしまったのです。いかに彼にとって大きな事件だったのか。いまだに心の傷が残っていて、その傷がどれほど大きいのかがわかった気もするのですが、とにかく話を聞かないことには、何があったのか。どのように過ごしたのかということが、全く想像すら出来ない。多くの日本人たちがそうだと思います。ですから、「あなたの話を聞かせてほしい。私がそれを伝えることで、少しでも多くの人にカンボジアのポル・ポト時代にどのようなことがあったのかということを伝えることが出来るので、よければ話してもらえないか」と彼に頼みました。そうすると、2～3日して彼のほうから「話してもいいよ」と言ってくれました。

人口 900 万人のうち 200 万～300 万人が虐殺

彼の話はこうでした。

1975年、彼のお父さんは政府の高官でしたが、ポル・ポト時代が始まってすぐに連れて行かれました。当時カンボジアの人口は約 900 万人と言われていますが、知識階級の方々がターゲットになって大量虐殺が繰り返され、200 万～300 万人の人が殺されました。彼のお父さんもその 1 人として連れて行かれて、そのまま帰ってくることはありませんでした。どこで、どのように殺され、どこにお父さんの骨が埋まっているのか、今もわからない。今度はお母さんが連れて行かれそうになりました。強制労働の現場に連行されるということでしたが、彼はまだ兄弟が幼いので、お母さんが連れて行かれると困ると思い、代わりに自分が行くと名乗り出たそうです。弟、妹にまだ乳飲み子の赤ちゃんもいたということです。彼は 7 人兄弟でした。彼がお母さんの代わりにダムの建設現場に行きました。強制労働の現場には、家族ぐるみで強制移住させられて労働をさせられているところもあれば、家族と離れ離れになって送られている人もいました。ずっと監視をされている中で、何家族かが一緒になって一つ屋根の下で暮らしていたということですが、1 日中兵士なり、ローカル・ピープルと言われている地元に住む農民から行動、言動、全てを監視されていました。ポル・ポトに対する悪口などをこっそりでも言っていたら、その夜「来なさい」と呼ばれて、その人は帰ってくることはなかった。そのようなことを何度も見ているので、とにかく何も言わず、逆らわず、毎日仕事

をこなしていました。

ある時、畑で仕事をしていたら、近所の 15 歳くらいのお兄さんを見かけました。まだ 9 歳だった彼は、近所のお兄さんを見て非常にうれしかったので仕事をするふりをしながら近づいて世間話をしました。「帰りたい。お母さんに会いたい」と言いました。そうすると、そのお兄さんも「自分も帰りたい」「じゃあ、抜け出そうか」ということになって、2 人でポル・ポトの兵士たちが昼寝をしているすきを狙って、畑の中をまずは匍匐前進で逃げて、山の中の手のひら程度の幅しかない獣道を一步も踏み外さないように必死で走って逃げたそうです。もし一步踏み外すと、どこに地雷が埋まっているかもわかりません。そして、必死で逃げて家にたどり着くことが出来たのですが、翌日にはまた兵士に捕まって連行されたそうです。後ろ手に縛られてどのくらい歩いたのか。かなり歩いたと思うのですが、近所のお兄さんが、彼の目の前で頭を打ち抜かれて殺されました。自分が誘うようなかたちで一緒に逃げた近所のお兄さん、小さい頃から一緒に遊んでいたそのお兄さんが自分の目の前で殺されたのは、彼にとっては大きなショックでした。自分も殺されると思ったのですが、「お前はまだ小さいから許してやる。でも、こうなるんだ。覚えておけ」と言われたそうです。

ポル・ポト時代が終わって、彼は家族と再会出来ました。これは非常にまれな話です。家族同士、5 年、10 年探し合って、ようやく巡り会えたという家族を何家族も私は知っていますが、そのような中でポル・ポト時代が終わってすぐに家族に会えたということは、彼は非常にラッキーだったと思います。ただ、その家族がたった 3 人だけになっていたのです。お母さんと妹が 1 人だけになっていた。7 人兄弟がたった 2 人兄弟になってしまっていた。小さな赤ちゃんは、お母さんのオッパイが出なくて栄養失調になりました。お母さんはその赤ちゃんの体をさすってあげることにしか出来なくて、死んで行くのを見守ることしか出来なかった。下痢になっても、当時病院などもなかったので、弱っていくのをお母さんはただ体をさすることしか出来なかった。安全な水も与えることが出来ず、そうやって小さな子供たちは命を落としていったのです。

彼の話聞きながら、もし自分がカンボジアに生まれていたらどうだろうと思いました。そして、本当に背筋がゾッとするくらい怖いと思いました。そして、憤りに近い疑問を感じました。なぜだろう。同じ人間なのに。目の前にいる彼が、同じ年の彼が、生まれたところが違うだけで、なぜそのような思いをしなければいけないのかと思いました。そして、自分の置かれた環境、この日本の現状を振り返ってみて、またいろいろな国々を旅行して思ったのが、自戒も込めて言うと、日本というのは 1 人ひとりが非常にわがままに生きている国だということです。そのような現状から見ても、日本には出来ることが多くあるのに、このままではいけないのではないか。日本に住む自分にも出来るチャンスがたくさんあるのではないか。何かをやらなければいけないのではないか。何が出来るのだろうかというところに至ったのです。

修復しても、入れる本がない大学の図書館

カンボジアにはユネスコの主催する「青年ワークキャンプ」で訪れたと申しましたが、その「ワークキャンプ」というのは、大学の図書室の修復作業を行うというものでした。大学の図書室の修復作業をやったものの、実は中に入れる本がないということが後でわかりました。ポル・ポト時代に、本という本は全てカンボジア国内で焼かれてしまいました。学校が虐殺の現場になったり、お寺が虐殺の現場になったり、収容所になったりしていました。実際に私が滞在していた大学も、教室は収容所となって、そこで多くの人が殺されたそうです。その大学の前の広場は、「キリングフィールド」と呼ばれています。「キリングフィールド」という映画がありますが、「キリングフィールド」は1カ所だけではなく、カンボジアのいたるところにあります。その大学の前の広場も、祠が一つ建っていて、「開けてごらん」と言われたので開けてみたのですが、中には頭蓋骨や骨が山盛りでした。「今あなたの立っているその下にもたくさんの骨が埋まっているんだよ。まだ拾い上げられていない骨があるんだよ」ということを言われて、ゾクッとしたのですが、その大学の図書室に本がないということを知りました。

なおかつ、大学生から本を送ってほしいと頼まれたのです。「英語で書かれた本なら何でもいい、活字が読みたい」と言っていました。教科書も当時はありませんでした。もちろん、辞書もありません。自分はというと、1人1冊どころか、数冊の辞書が机の上にあった記憶があります。英和辞典、和英辞典、漢和辞典といったように、何冊も積み上げていた記憶があるのですが、カンボジアでは大学に1冊もないのです。先生が教壇に書いているものが全てです。そのようなことで、「私が使っていた本でよければ送ってあげる」という約束をしてカンボジアを後にしたのですが、カンボジアから帰る飛行機の中で、あの本も、この本もと思っているうちに、もっといろいろな本が送ってあげたくなりました。例えば、地球儀や地図も見せてあげたい。宇宙に関する本、生物に関する本、たくさん写真が載っていれば英語が難しくてもわかるのではないかなどと思っているうちにリストが膨大になって、買わなければいけない。「お金がない、どうしよう。」その時に、イギリスのチャリティショップのことを思い出しました。あのシステムをやればいい。そうすると、日本でも多くの人にチャリティショップのことを知ってもらえるかもしれない。日本にもこのようなチャリティショップがあちこちに出来ればいい。それを知ってもらうためにも、もし自分が始めたことで「簡単に出来るんだ」と思ってもらえればいいのではないかと思い、始めようと決めました。

1994年2月にカンボジアに行って、3月に戻ってきました。そして、4月から動き始めて、5月にチャリティショップをオープンしました。

無理のないことをできる範囲で、チャリティショップをオープン

このチャリティショップですが、まずは商店街を歩いて、貸してくれそうなところを探したのですが、まず家賃に驚きました。30万円とか、50万円と言われました。その

ようなお金があれば、そのお金で本が買えると思いました。しかし、何回も歩いていると、空き物件が何軒もありました。アーケードの中だけではなく、路地に入ったところにもたくさん空家があるので、合わせると 100 軒程度あるだろうから、それを全部あたれば 1 件くらいわかってもらえるのではないかと思い、まず自分が何をしたいのかまとめようと思い、企画書を書きました。それをコピーしてもって回って、いろいろな人に話をしました。そうすると、まずどこに行っても言われることは、「お前は、アホじゃないか。そんな調子のいい話があるわけがない。ただで貸してくれって言って、誰が貸してくれるか」ということでした。私は「アホだけど、たぶん 100 件回れば、このアホに付き合ってくれる人もいるんじゃないか」と思い、いろいろな方々に声をかけました。そうすると、いたのです。ビルの一角を 3 ヶ月間でよければ無料で貸してあげるということで、そこを借りることにしました。ビルの 5 階を借りて 3 ヶ月間活動を始めることにしたのですが、周りの友達に声をかけて「家に眠っているものを、何でもいいから持ってきて」と頼みました。そうしたら集まるわ、集まるわ。「日本の家には、いないものがどのくらいあるのか」というくらい、あつという間にお店の中がいっぱいになりました。3 ヶ月間で 74 万円の収益が上がりました。3 ヶ月経った時に、74 万円の収益が上がったのですが、何より商品が、お店を始めた時の 5 倍の量になっていました。捨てるわけにいかないし、これをどうしよう。どこかまた貸してくれるところがあればいいなと思ながら、とりあえず活動を一端終結ということで、74 万円のうちの 40 万円を学校を建設している団体に寄付というかたちで、34 万円を本の購入費に当てて、3 回に分けて自分でカンボジアまで持って行きました。

そして、どこか貸してくれるところがあればいいなと思っていると、またいたのです。不動産会社が持っている物件で、「ボロボロだけれどもよければ使って下さい」ということでした。6 年間空家だったので、開けてビックリと言いますか、まずシャッターが錆びていて上がりません。無理やりこじ開けて入ってみるとクモの巣だらけ。そこを借りて活動を始めました。1 ヶ月かけて自分たちで修復作業をしました。

ここでまずゴミが出てきます。畳の部屋は、天井が雨漏りで落ちているので、いたるところが腐っていました。畳もどけなければいけませんし、土壁がガラス障子と一体化してしまっている状態でしたので、それを取り外したり、ガラス障子も処分しなければいけない。そのようなことで、ゴミを処分するところからスタートしたのですが、廃棄するにもお金がかかります。どうしようかと思っていましたら、ボランティアで来ている方が、「私の知り合いでゴミの収集業者の人がいるから聞いてみよう」と言ってくれたので、いくらで出来るのか、出来れば安くしてほしいと頼みましたら、活動の趣旨を理解してくれ、トラック 2 杯分無償で処分して下さいました。

今度は腐っているところを補強する板がいます。コンパネは結構高く、1 枚 2,000 円程度でした。私は司会業ですので、夏祭りの司会もよくやります。イベントのステージは木で出来ているのですが、コンパネを使っています。そのコンパネはどうしている

のかイベント会社に聞いてみましたら、倉庫に置いてあるということでした。何枚かいただけないかと言ってみると、いただける上に運んでくれたのです。それを使って修復作業をしている姿を見て、「何だ、その手つきは」ということで大作業も手伝ってくれることになりました。

今度はペンキが必要になりました。高校時代の同級生が塗装会社の社長をしているので、電話をして相談してみると、「白も少し黄色がかったら売れないので、それでよかったらあげるよ」と言って、刷毛もセットにしてプレゼントしてくれました。そのようなことで、1ヵ月かけてそれなりのかたちに来たのですが、振り返ってみると、100人を超える人がいろいろなかたちで関わってくれました。その時に、「そうだ、無理のないことをできる範囲で頼めばいいんだ」と気付きました。手や足に障害を持つ人に運搬をしてくれとか、運送会社の人にケーキをつくってくれと言っても、それは無理な話です。しかし、出来ることを、出来る人が、出来る範囲でやれば、その力を少しずつ集めればかたちになるのではないか。その辺りが今のセカンドハンドの大きな原点でした。セカンドハンドの特徴は、そのようないろいろな企業などの出来る力を少しずつお借りしながらやっています。運送会社から協力してもらったり、印刷会社には格安で印刷してもらったり、物件を持っている人からは倉庫を借りたり、パンをつくっているところは、賞味期限が切れてしまいそうで、翌日お店がお休みという時に持って来て下さる。ボランティアの人がそのパンを格安で買う。それが募金になる。それだけでも年間3万～5万円になります。

そのようなことや、これから見ていただくビデオもビデオ会社が製作してくれたり、スーパーがポスターを貼ってくれたり、チャリティコンサートをする時にチケット販売の協力をしてくれたり、レストランや、居酒屋では募金箱をレジの横に置いてくれたり、フェアトレード商品を飾って販売してくれたりというところがあります。そのようなかたちで、協力をしてもらいながら活動を12年、これまでにカンボジアに多くに支援を届けることが出来ました。そのカンボジアへの支援の様子をビデオにまとめているのでご覧いただきたいと思います。ちなみに、これは10周年の時につくったもので、2年近く前のものなので、少し内容が古いのですがご覧いただきたいと思います。

小学校建設によって65%の出席率が90%に

【ビデオ】1994年5月27日、今からちょうど10年前、セカンドハンドは誕生しました。この10年間、活動の環は福岡から北海道まで広がり、多くの支援をカンボジアに届けることが出来ました。セカンドハンドは、香川県高松市に本部を置き、チャリティショップを資金源として国際協力を行っています。活動の中心はボランティアスタッフ。小学生から80歳代の方まで、お店番や倉庫、運搬作業、チャリティ作業など、それぞれ可能な時間に出来る範囲で関わっています。この10年間の支援を最新の映像でご覧いただきましょう。

まず、学校建設。毎年1棟ずつ建設し、これまで10校舎が完成しています。カンボジアでは校舎があっても、倒壊の危険があったり、雨季は雨漏りで校舎が使えないところがたくさんあります。子供たちが安心して授業が受けられるよう、セカンドハンドは小学校建設を支援しています。小学校が完成したことで、出席率が65%から90%に上がったという学校。壁が出来て、隣の教室の音が聞こえなくなったので、集中して授業が受けられると、生徒などの喜びの声がたくさん届きました。生徒だけでなく、先生にとっても真新しい教室はうれしいようです。月に10ドル程度と少ない月給ではありますが、誇りをもって仕事をしています。学校建設は周辺の村の人たちにとっても大きな喜びです。現在、11校舎目の小学校をシャンティ国際ボランティア会の協力を得て建設中です。今年6月中に完成する予定です。

地雷による障害者や、女性の自立を支援する団体にも協力しています。ラチャナ・ハンディクラフトは、内戦で夫を亡くした女性や、貧しい状況の中で一家を支えている女性、孤児などを対象に職業訓練を行っている団体です。セカンドハンドでは、香川県内で集めた足踏みミシンを送ったり、商品を定期的に購入することで活動を支援しています。

2001年、カンボジアで最も貧しいと言われている南西部のスヴァリエン州にラチャナと協力して職業訓練プロジェクトをスタートさせました。産業がなく、土地もやせているため、多くの人が出稼ぎに出ている州です。ここで女性たちの自立を目指し、職業訓練プロジェクトを始めました。まず、指導者となる人材を1年かけて育成し、職業訓練センターを建設。そして、そこに香川県内で集めた足踏みミシンを送りました。現在、2期生の訓練が始まろうとしているところです。

セカンドハンドはバタンバン州にある孤児院「ホームランド」にも支援しています。昨年施設の事務所部分の建設を支援した他、2002年からフォスターペアレント制度を設けて継続的に支援しています。これはホームランドの子供を日本の里親が経済的に支援するというもので、現在21名の方が里親として支援しています。手紙や写真のやり取り、日本からのプレゼントを届けるなどの交流のお手伝いもしています。

2003年、セカンドハンドは新たな分野で支援を始めました。プノンペン市保健局が郊外の貧困地域で実施している、医療プロジェクトへの支援です。栄養を十分に取れない貧しい人たちは病気になりやすいため、仕事を休み、薬を買うために借金をするという悪循環を繰り返しています。そんな貧困な悪循環を断ち切るため、プノンペン市保健局は現在四つのモデル地区で医療施設を建設し、保健医療を行っています。その内の2棟をセカンドハンドが建設しました。貧しい人は無料で診察を受け、薬がもらえるシステムになっています。このプロジェクトは、世界各地から寄せられた基金で運営されています。今年、セカンドハンドはプノンペン市保健局の依頼により、新たに入院施設になる建物を1棟建設支援します。現在、入院できる部屋は1室だけです。完成すれば、貧しい女性たちも金銭的な心配をせずに出産し、入院出来る施設となります。

文字の読み書きが出来ない約1,500名を対象に、読み書き出来るよう識字教育支援

も行いました。また、識字教育を実施する団体が情報交換、資料を閲覧出来る場所として、識字リソースセンターも建設しました。このような支援活動に対し、カンボジア政府から勲一等にあたるメダルをいただきました。

支援はカンボジアに限ったわけではなく、地震や洪水など、被災国への募金活動を行っている他、日本国内では阪神淡路大震災発生時に、ポリタンクや緊急援助物資を届ける支援などを行いました。また、体験学習の受け入れや、講演も行っており、これまで2,000人以上の生徒がボランティア体験しています。2003年には、中学、高校生が中心となって活動するセカンドハンド学生部「小指会」が誕生しました。今年、カンボジアに中学校を建設する予定で募金活動に取り組み、現地の中学生との交流を始めています。毎年実施しているツアーには、小学生から70代の方まで、延べ100名以上が参加しました。開校式に参列したり、運動会を開催しました。支援先の様子は、セカンドハンド通信を通して3ヵ月に一度お知らせしています。発行部数は5,000部を超えました。ニュースレターの発送作業をはじめ、ホームページの作成や更新もボランティアが行っています。次期支援先や、運営方針もボランティアで組織する運営委員会で話し合い決定しています。毎月2回開催する運営委員会には、活動に賛同する人であれば誰でも参加出来ます。

お店番、倉庫作業、運搬、事務、全ての作業がボランティアで支えられているセカンドハンド。10年間の支援総額が1億円を超えるという結果も、すべて無償で活動を支えるボランティアスタッフ、場所や機材を提供してくださっている方や、企業など、あらゆるかたちでサポートしてくださっている皆さんの協力があったからこそ、なし得たことなのです。

世界みんなが平和で幸せになるように。一つでも笑顔が増えるように。そんな願いを込めて、セカンドハンドは活動しています。「世界の平和なんて理想にしか過ぎない」という人もいるけれど、まず理想を持つことから始めるとセカンドハンドは信じています。

大きすぎる夢かもしれませんが、でも、1人ひとりが力を出し合えばその夢に近づくことは出来るはず。世界を変える力はなくても、私たちには世界を変える人を育てるチャンスがあります。1人から、やがて100人、1,000人と。【ビデオ終了】

日本から送った80台の足踏みミシンで職業訓練センターをスタート

新田 活動紹介ビデオをご覧いただきました。このビデオ制作は、ビデオ会社が協力してくれて、ナレーションを女優の大場久美子さんが協力してくれています。大場さんは個人的にボランティア活動をやってくれて、時々地元で、自分でチャリティバザーを開いてくれたりしています。この中の情報は古く、今は学校が13校舎出来ていますし、医療施設が今度四つ目の着工になります。どんどん進んでいます。ビデオの中で職業訓練プロジェクトの話がありましたが、これが現地で作ったものです。手に取って見て

いただけると一番良いので、よければ後ほど手に取ってご覧下さい。縫製がなかなかしっかりしているのですが、こういった商品をカンボジアでつくって、それを定期的に輸入して販売しています。

職業訓練プロジェクトは、私たちが建設した小学校の児童の家庭を訪問した時に聞いた母親の話がきっかけでスタートしました。その家庭は6人兄弟ですが、下の男の子3人を卒業まで学校に通わせるため、経済的な理由で上の3人の女の子を小学校3～4年までしか行かせていない。働いて現金を稼いでほしいけれども、その地域では仕事が全くなく、都会に出稼ぎに行くしかありません。カンボジアでも、最も貧しい州と言われているスヴァリエン州はカンボジアの南東部に位置し、ベトナムとの国境を有する州です。その地域は非常に土地もやせていて、洪水と干ばつの繰り返しで、稲作の収穫率の低いところですよ。産業がなく、本当に何も無いところのため、出稼ぎに出る人は多く、プノンペンで働く、全出稼ぎ労働者のうちの40～45%がこのスヴァリエン州出身と言われています。

その児童の家庭を訪問した時に、そのお母さんが「私はあなたを小学校の開校式の時に見たわ。建ててくれて有難う。今、下の息子が3人とも通っているの。でもね、上の3人の娘は仕事がなくでこうやって家にいるんですよ」と、泣きながら私に訴えてくるのです。「このスヴァリエンには仕事がないのです。プノンペンに行けばあるのだけれども、プノンペンに行けば、多くの女の子は人身売買の被害に遭うと聞いている。だから娘を出したくない。だけど、明日食べるお米がもうないんです。だから何とかしたい。でも、娘を出したくないんです。でも、ここには仕事がないんです」ということをずっと訴えながら泣くのです。私は非常に胸が詰まりました。何が出来るだろう。

今ここで100ドルをあげれば、その家族はお米を買うことが出来るかもしれない。しかし、この問題はこの家族だけの問題ではありませんし、100ドルを渡して今お米が手に入っても、来月、再来月、来年はどうなるのか。飢えた者に魚を与えるよりも、その釣り方を教えるほうが良いと言います。

この商品をつくらしている団体が、カンボジアの北西部のバタンバン州というところで活動しており、10年前のこの団体の活動当初からミシンを贈るなど、支援を続けています。今では縫製の技術もずいぶん上がってきました。最初はミシンの線が斜めにジグザグに縫われていて、真っ直ぐ縫わなければいけないというと、「何で？とまっているから、いいじゃない」と言いますし、ファスナーのところに隙間が開いていたりするのですが、「いいじゃない、漏れないから」と言います。「日本人はこれが少しでもずれるとだめなのよ」と言っても、それがわからないのです。このようなバッグも、今は中も同系色になっていますが、昔は赤いバッグの中が黄色とか、グリーンのバッグの中がピンクというように、ビックリするような色合わせで、日本人には合いませんでした。そんな状態に6～7年付き合っ、ようやく2～3年前頃から日本人の好みに合う仕上げが出来るようになりました。

その団体は内戦で夫を亡くした女性たちであるとか、ご主人が障害を持つ女性たちを支援していて、代表者にスヴァリエンの状況を話しました。その女性も、「スヴァリエンが貧しいのは知っている。でも、遠いから私には何も出来ない」と言うのです。とにかく一緒に見に行こうと、車で十何時間かかるのですが、その女性を連れて現地まで行きました。村を回って女性たちの現状の聞き取り調査をするうちに、その代表者は非常に心の優しい人で、ビデオにも出ていたのですが、彼女は涙もろいのでボロボロ泣いて、「私こういうのを見せられると放っておけない。わかった、やるわ」と言ってくれました。「では、資金はセカンドハンドが出しましょう。技術指導はあなた方がやって下さい」ということになりました。そこの団体の隣りの家を寮として借り上げて、スヴァリエン州で指導者となる人材を面接して選んで、1年間バタンバン州という北西部に連れて行って指導者となるための訓練を受けてもらいました。そして、職業訓練センターを建設し、そこに置くための足踏みミシンを送りました。このミシンは、香川県内で集めた足踏みミシンで、ある方はお嫁入り道具として持ってきたという足踏みミシンを提供していただき、80台送りました。そのミシンを使って職業訓練を行うというかたちで進めています。これはそこでつくったバッグです。この小さいゾウのマスコットは、スヴァリエン州というところで作ったものです。

運営支援は3年間の約束で、まず、初年度は運営費の100%、2年目は80%、3年目は50%を支援することになりました。つまり、4年目はゼロです。そして、今年5月から4年目になるので、支援費がゼロになります。そこで彼女たちは、自分たちでプロジェクトを立ち上げようと考えました。今、自分たちは安定した給料をもらえるようになって、生活が変わりました。以前は非常に貧しい状況で、薬も買えない。自分の洋服もアクセサリも買えないという状況だったのですが、今は家族のために栄養のあるお肉や、魚も買えるようになりましたし、野菜も買えるようになりました。ちょっとした洋服やアクセサリも買えるようになりました。現金収入が得られる技術を地元の女性たちに教えているのですが、ここに通って来られない人もいます。農村部の貧しい人は交通手段を持っていません。そのような方々が多い地域に、自分たちが出向いて行って指導することが出来ないかということをご提案してきました。昨年提案してきた地域を回ってきました。確かにその地域は非常に貧しく、ニーズもたくさんある。村長も協力してくれるということなので、そこに出張指導サービスをすることになり、その資金を支援するための調査、調整のために私は来週カンボジアに行きます。彼女たちがそうやって動いていることは、非常にうれしいことです。そもそも、貧しくて支援を必要としていた人たちが、今、指導者になって自分たちが安定して、今度はその地域の人たちを助けるための活動をしようとしている。非常にうれしいことだと思っています。

セカンドハンドの学生部「小指会」、スラムの家庭にホームステイ

このように人を育てていくということは、大切なことだと思っています。これはカン

ボジアに限らず、日本国内でも人を育てることが非常に大切なことだと考え、ビデオの中でも「小指会」の話が出ましたが、私どもは学生部を立ち上げて、現在、日本国内での人材育成にも力を入れています。2003年に「小指会」を立ち上げたのですが、2004年、中学校の建設ということを目標に「小指会」のメンバーで頑張りました。まず、人材育成、学生部と言っても何をするのか。子供たちも何をしたいのかわからない。とりあえず募金活動をしました。しかし、それだけではなかなか成果を感じられません。何か目標があればいいと思っていたところ、たまたまカンボジアのほうから200万円の建設資金があるのだけれども、中学校を建設するためにはあと100万円余り足りない。何とかセカンドハンドで支援してくれないかという話があったので、それを「小指会」の学生部の皆さんに話をしました。そうすると、自分たちでやってみようということでした。街頭募金をしたり、バザーをしたりして、2004年の1年間でその100万円を集めました。そして、その中学校が2004年完成しました。2005年3月その学校を見せるために、中学、高校、大学生たち、活動に参加した人たちの中の有志8名をカンボジアに連れて行きました。

昨年は、私どもは国際交流基金の地域交流賞をいただき、賞金を200万円いただきました。その200万円のうちの一部を使って、5万円程度の自己負担はありましたが、その子供たちを連れて行きました。現地では、自分たちで建設した中学校に通う子供たちの家にホームステイしてもらいました。スラム街です。カンボジアでも非常に貧しいと言われている、1日1ドル以下の生活をしている、電気も水道も当然ない。雨が降ると洪水になって、家の中まで水浸しというようなところですが、私どもが行った時は乾季だったので、それほど衛生状態は悪くはありませんでした。家にトイレがないという家庭もあります。どうするかというと、「その辺りでトイレをして下さい。大の場合はビニール袋に入れて出来るだけ遠くに投げて下さい」というような状態のところですが、そこに1泊のホームステイをしました。中学、高校生たちに絶えられるのか心配だったのですが、絶えませんでした。「結構楽しかったです。月明かりの中での水浴びも、なかなか気持ちよかったです」と、意外に嬉しいのです。そして、自分たちがいかに恵まれていたのかを知らされましたと言っていました。「水も大切に使わなければいけないと思っただし、今まで勉強が出来るのが当たり前だと思っていたけれども、そうじゃないんだ。家族がいるのがとても幸せなことなんだ。家族と一緒にいられることが幸せなんだということを感じた」ということも話していました。彼女たちは自分たちが建てた学校を見ました。そこでプノンペン市長も列席する中、開校式典に出席しました。彼女たちは、「自分たちにも世界は変えられるんだ」と感じたと言っています。「平和というのは祈ることしかできないと思っていた。でも、その祈る手を少し差し伸べたら自分にも何か出来る。世界を変えることが出来るんだ」ということを、彼女たちは今言っています。成し遂げた成果を見、自信を持ったのだと思います。

お金があったら孤児院をつくりたい、 人が働ける工場をつくりたいと語るカンボジアの学生

先日、カンボジアのスラム街に住む高校生たちを、今度は招聘しました。4名の高校生と、カンボジアから付き添いということで2名。そのうち1名は職業訓練センターで働く指導者の女性を付き添いとしてメンバーに入れて招聘しました。これは香川県との協働、委託事業で、希望する県内6校の高校で交流授業を行いました。まず、事前学習として、私が各高校で2回に渡ってお話をしました。実際にカンボジアの学生さんを迎えて、楽しく交流授業をしたり、彼らのバックグラウンドを聞く時間を設けました。スラム街での生活、親を亡くしたり、生まれる前のポル・ポト時代に兄弟を亡くしたという話が出てきました。目の前の同じ年の人からそのような話を聞くということは、日本の高校生たちにとって非常に大きな衝撃でしたし、自分たちの生活を見直す機会になったようです。カンボジアの生徒たちにとっても大きな自信となりました。彼らが帰る時に、私にカードを渡してくれました。「自分たちは何もない人間だと思ったけれど、この滞在した2週間で自分たちがスペシャルであるという気持ちにさせてくれたし、自分たちにも世界を少しずつでも変えていく力があるのではないかと信じさせてもらえた。何かやっていきたいと思っている。これから、まず勉強を頑張ります」ということが書いてありました。しかし、その彼らの中には帰ると住む家がないという生徒もいます。スラム街の中でも土地の権利があり、生きていくために親がその権利を売り、セカンドハンド学生部「小指会」の奨学金を受けている生徒のうち2人が住む場所を失っています。奨学金で何とか学校に行っているけれども、1日1食食べるのがようやくという生活をしています。

その彼らと日本の学生とディスカッションをしたのですが、「今お金があったら何がしたい？」という質問で、日本の学生は「自分の視野を広げるために世界旅行がしたい」「DVDがほしい」という人や「バレーボールのチームをつくりたい」という人もいました。カンボジアの学生はというと、「お金があったら孤児院をつくりたい。自分がそうだったように、親がいない子供たちを受け入れて、学校に通わせてあげたい」「弟の支援をしたい」という人もいました。「弟が成功するように、まずは学校を出してやって、大学まで行かせてあげて、そして事業をやるのであれば、そのための軍資金を出してあげたい」というのです。また、「工場をつくりたい」という人もいました。儲けるのかなと思いきや、カンボジアには、働きたくても働く場所がないという人が多くいますから、そのような人のためにお給料が渡せるような大きい工場をつくって、出来るだけ多くの人を雇いたいと言っていました。

そのような一つのテーマをいろいろと追っていくうちに、日本の学生も、カンボジアの学生もお互いの違いを知って、いろいろと衝撃を受けたようです。非常に良い交流事業だったと思います。これからもこのような事業は続けてやっていきたいと思ひますし、もし皆さんの中で、本気でカンボジアに行ってみたいという方がいらっしゃったら言っ

てきて下さい。昨年秋から12月まで山口大学の医学部の学生さんを3ヵ月に渡って現地で受け入れました。カンボジアに行ってみたい。ただし、生半可な気持ちではなく、本気でやりますという人がいれば来て下さい。そして、カンボジアに行ってみたいので情報を下さいという人には、情報を提供します。私どものプロジェクト・サイトなどご案内しますので、よかったらカンボジアにも出かけてみて、自分の目で見てくるのもいいのではないかと思います。是非出掛けてみていただければと思います。

自分が変わらなければ世界は変わらない

セカンドハンドには、いろいろなかたちでボランティア参加をしている人がいます。ここからでもボランティアは出来ます。例えば、切手を集める、書き損じハガキを集める、家の前でチャリティバザーを開いてみる、周りの人に声を掛けて提供品を集めるということも出来ます。ただし、よくこのようなところで話をすると、「じゃあ、ものをあげればいいんですね」となるのですが、それは違います。まず、いらぬものは買わないで下さい。リユースの前にリデュースです。いらぬものは買わない。いただいたけれども使わないというものを私どもにいただいたらありがたいと思います。最近100円ショップで買ったものや、大型安売りチェーン店の洋服が私どもところに非常に多く送られています。安いのでポンポン買って、飽きるとあげればいいのかと思われるのですが、そのような安物は返って迷惑です。ゴミをくれても迷惑なので、売れるものを下さい。しかし、ものをくれてもゴミになると困るので、出来ましたら現金が有り難いです。ですから、消費をする前によく考えて、100円で安いから買おうではなく、他のものでも代用出来ると思ったら我慢して、その100円のうちの1%でもいいので募金箱に入れておいて下さい。そのほうがずっと有り難いです。

また、その他にもボランティアでは、翻訳家の方、デザイナー、データ入力をする方もいれば、ホームページをつくってくれる人もいますし、ポップを描いてくれる人、これも遠隔地でも出来ます。そのようなことが何か出来るという人がいれば、是非手を挙げて下さい。ここでも、もしかすると香川県出身の人がいるかもしれません。今度のお休みの時には是非いらして下さい。車の運転、運搬、倉庫で整理をする、お店番をする、ニュースレターの発送作業をするなど、ありとあらゆる仕事がありますので、よければ来て下さい。大阪にも支部があるのですが、拠点があるだけで特に活動はしていません。もし、この京都近辺でという方がいらっしゃったら、京都でも何人か協力して下さっている方がいらして、年に1度募金をして下さっています。そのようにチャリティバザーを主催するなど協力して下さる方がいらっしゃればうれしいです。これを期にセカンドハンドとも何らかのかたちでお付き合いをしていただければと思います。

開発途上国が抱える問題は、非常にさまざまに絡み合っていて、問題をより複雑、かつ深刻にしているのが現状だと思います。これらの問題の根底には、やはり貧困ということがあると思います。こうした貧困や、経済的な格差の拡大は不安定な社会を生みま

すし、やがては紛争、テロにつながりかねない、その原因となるものだと思います。貧困撲滅こそが、本当は世界のみんなが、地球のみんなが幸せで平和に生きられることにつながるものだと思います。それだけではありませんが、これは大きな要因だと思います。地球規模の平和と安全。これは人類全ての課題として取り組む必要があると思います。私たちは小さな活動しか出来ていませんが、目標は世界平和です。小さな一歩でも、前に進まなければ世の中は変わりません。まず、自分が変わらなければ、世界は変わりません。あなたが動かなければ、世界は変わらないのです。これは皆さんお1人おひとりに言えることです。1人から始まっていくのです。是非、その1人に一緒になっていただければと思います。今日はどうも有り難うございました。

松下 新田さん、どうも有り難うございました。この講座は「地球環境と市民社会」というテーマですが、なぜ国際協力か、なぜボランティアか、あるいはなぜカンボジアかと思われる方もおられると思います。結局、私たちがテーマとしている持続可能な社会というのは、簡単に言うと、人々が人間らしく安定して暮らしていけるという社会です。そうすると、日本だけが豊かで安定的なことはあり得ないわけで、お話にもありましたように、戦争が最大の環境破壊であり、社会の破壊で、人間破壊である。そのような中で、ボランティアは人のためにやるというよりは、おそらく私たち自身がより良く生きるための一つの方法だという印象を持ちました。大変感銘深く、考えさせられるお話でした。

特に、1人から始めようということと、理想を持つということ、さらにおそらく新田さんの場合、ここまで来られた成功の背景には、企画力や、コーディネーターとしての力があつたのだと思います。それではせっかくの機会ですので、会場から質問等がありましたら、是非聞いてみて下さい。カンボジアに行きたいという人があれば手を挙げて下さい。

会場 いろいろな材料を縫製などに使っていると思いますが、そういった材料は農業でつくっていると思います。土地がやせているという話があつたので、原材料から一貫してつくっているのか、もしくは農業に関する支援もしているのかというお話をお聞きしたいと思います。

新田 私どもは特に農業の支援をやっていません。実は、この原材料はカンボジア国内だけではありません。もともとの原材料は、ベトナム、中国、タイ辺りから入ってきていて、もちろん、カンボジアで取れるシルクもあります。コットンもカンボジアで取れ

るものもあるのですが、混在していて100%カンボジアというわけではありません。例えばこのショールはカンボジアで織ったものですが、これは私が色の指定をして日本人向けにつくったものですが、原材料のコットン是中国のものです。まだまだカンボジアには良いものがないのです。あることはあるのですが、織っている途中で糸が切れるという問題があり、それをどうすれば強くなるのか、織る時に工夫を加えるとか、ノリを付けてみるなどの工夫をしているのですが、今はまだ開発中で、そのような専門家の方がいらっしゃったら助けてほしいというところです。

会場 カンボジアという国は社会主義国、あるいは共産主義国なのでしょうか。

新田 今現在は民主主義です。

会場 最近よく耳にするのですが、中国から手を引いてベトナム、カンボジア、インド、東南アジアに日本の生産拠点を移すということが囁かれている状況下にあります。今おっしゃっていることは、非常に感銘を受けました。やはり、そのような生産拠点を移していくということについては、日本がそこに大きな基盤を置いて、一大生産拠点をつくって世界にものを輸出するというのを考えているのではないかと思います。

新田 一つ補足しておきますが、私たちがやっているのはフェアトレードで、私たちは生産拠点を移しているわけではないのですが、日本の企業は実際はかなり進出しています。そのような時に是非気にかけていただきたいのが、現地の人たちの労働の環境、条件です。非常に安い賃金で、非常に悪い労働条件で雇われているというのが現状なので、現地の人たちがきちんと安定した給料をもらえるように、劣悪な環境で働かせているのではなく、私たちが共に助け合えるようなフェアなトレードが出来ればいいと思います。

松下 それでは改めて新田さんに拍手をお願いしたいと思います。もし、関心がある方は実際にカンボジアから送られてきたものを見ていただいても結構です。